

IV-206 中心商業地におけるアーケードの評価について

—宇都宮市を事例として—

宇都宮大学 正員 古池弘隆
石川県津幡町 齊藤晶史

1. はじめに

商店街によくみられるアーケード、特に昭和30年代に作られた全国一様な軽合金製のアーケードが見直されつつある。現代の個性やうるおいを重んじる街路の景観にそぐわなくなってきたのである。本研究では、そのアーケードを題材に取り、アーケード街を通行している歩行者に対するアンケート調査などより、アーケード街の直接評価を行い、評価尺度として適当なものを選択することを目的とする。

2. 調査地点の概要

本研究で調査をおこなったアーケード街は、宇都宮市の中心部をつらぬく大通り、中心商店街であるオリオン通り、そして最近アーケードを撤去したシンボルロードの一部である。さらに、大通りについては大きく分けてアーケードの様相が3タイプに分けられることからA、B、Cの3ブロックとする。よって調査地点は5ヶ所である。（図1）

3. 研究の方法

まず、既存研究をもとに、景観的評価と機能的評価に用いる形容詞対（以下評価尺度という）を抽出しSD法によりアーケード街評価の現場実験を行う。評価尺度は5段階評価とした。街頭での歩行者による評価値を用い、アーケード街を直接評価してみる。ここでは、アーケード街の地点毎の被験者の評価の平均を取ることにする。景観や機能の評価は、個人差によるものが多いと思われるが、平均を用いることにより、一般的な評価とし、平均との差は個人差によるものとして扱う。

さらに、因子分析を用いてアーケード街の評価構造と評価尺度との関連性を分析し、アーケード街に適合した評価尺度を選択する。また、通行量を基にして中心商業地の街路の分類を行い、調査地点の特性を求め、商店へのヒアリング調査も含めてのアーケード街の総合評価を行う。

4. 分析及び考察

アーケード街ごとの直接評価の結果を図2に示す。（ただし、シンボルロードを除く）次に、12の評価尺度の評価値を変数とし、因子分析を適用し、評価尺度間の類似性を明らかにした。その結果を表1に示す。

① まず、第Ⅰ因子は、視覚で確認できるいわゆる「外観」である。特にアーケード自体の外観との相関も強く、街路の整備上からも重要な因子と思われる。視覚因子といえる。

② 第Ⅱ因子は、アーケード街の「広さ」を表している。間隔の因子といえる。特にこの因子は「好ましき」との相関も強く、道路、歩道の広さの操作の面で重要な関わりを持っている。

図1 調査地点



③ 第Ⅲ因子は、アーケード街に対する「安心さ」を表し、安全性の因子といえる。この因子も「好ましき」との相関が強い。

④ 第Ⅳ因子は、歩行者の流れ、歩きやすさを示す因子であり、歩行性因子といえる。

⑤ 「不便-便利」の評価尺度は、この調査での他の共通因子では把握できないという結果になった。機能的評価である利便性は独立した因子であるといえる。

以上より、アーケード街の評価は、外観・間隔・安全性・歩行性そして利便性の面から評価できることが分かった。それを代表させるには、(汚い-きれい)(狭い-広い)(不安感のある-安心感のある)(不便-便利)の評価尺度が有効であると思われる。

以上を踏まえて、調査地点別に特性を述べてみる。

(i) 大通りA：この地点は他より、道路も歩道も広いた

め、間隔・安全性・歩行性について優れている。しかし、アーケードは軽微でしかも連続していないため、雨天対策にも余り役だっていない。アーケードの大きな利点である「商店街としての一体感」も得ることは出来ない。街路の改善策としてアーケードを取り外すことがよいと思われる。

(ii) 大通りB：この地点のアーケードは、いわゆる普通の軽合金製のものである。そのため「平凡さ」が突出していると思われる。

(iii) 大通りC：アーケードは新しく、個性的であり、屋根が半透明のため外観の評価は他よりも良いようである。しかし、設置した側である商店主による評価に過大評価のあることも事実である。

(iv) オリオン通り：この地区は高度の商業集積区域である。他と違って全蓋式であるため、「広さ」に影響が出ている。「歩きにくさ」については、舗装が滑りやすいのと、駐輪・通行自転車による歩行スペースの減少によるものと考えられる。

(v) シンボルロード：この地点だけは、以前(アーケードの存在した頃)と今とを比べてもらった。アーケード撤去によって「広さ」「明るさ」が増したことが分かる。ただ、調査時が工事中であったので、その影響もかく尺度に現れているものと考えられる。完成後にはまた異なった結果が得られるかも知れない。

総じて、本研究で調査したアーケードについては、外観的に負の要因しか見いだせなかった。アーケードの有用性は、気象条件に対しても明らかにされており、これからのアーケードとしては、外観が良く、しかも、広さ・歩行性・明るさを妨げないものでなければならない。

5. 今後の課題

本研究で採用した評価尺度の他に、「親密性」「活動性」といった内的要素の高い尺度についても検討する必要があるであろう。また、物理的な街路幅員などとの関連も明らかにする必要がある。

図2 各調査地点に対する評価

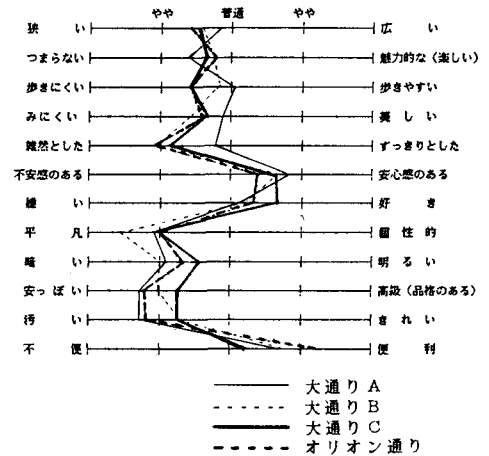


図3 シンボルロードに対する評価

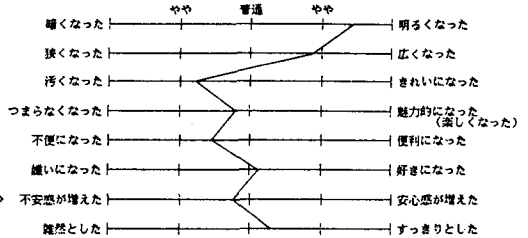


表1 因子分析の結果

評価尺度	因子
狭い—広い	Ⅱ
つまらない—魅力的な(楽しい)	Ⅳ
歩きにくい—歩きやすい	Ⅳ
みにくい—美しい	Ⅰ
雑然とした—すっきりとした	Ⅰ, Ⅳ
不安感のある—安心感のある	Ⅲ
嫌い—好き	Ⅱ, Ⅲ
平凡—個性的	Ⅰ
暗い—明るい	Ⅰ
安っぽい—高級(品格のある)	Ⅰ
汚い—きれい	Ⅰ
不便—便利	—